

心理学と産業保健を基盤に、健康で活き活きと働くための要因を科学的に明らかにし、実践方法の開発と有効性に関する検証を学際的視点から行っています。

わが国では、働く人々を取り巻く社会経済状況が、大きく変化しています。産業構造の変化、情報技術の進歩、少子高齢化、共働き世帯の増加など枚挙にいとまがありません。またコロナ禍を経て、在宅勤務や郊外移住など新しい働き方を模索する動きも始まっています。

島津研究室では、3つのHP（健康増進 [Health Promotion]、生産性の向上 [Human Performance]、幸福 [Happiness]）を目指し、健康で活き活きと働く「ワーク・エンゲイジメント」をキーワードとしながら、これまでにない斬新な発想をもった研究テーマを設定し、従来の枠を超えた介入手法の開発に挑戦しています。

学生が履修する研究会では、各学生が「個人研究」と「小グループ研究」に従事しています。個人研究では、「働く」「こころ」に関するテーマを自由に設定し、先行研究のレビュー、フィールドでのデータ収集やヒヤリング、データ解析、成果発表までを主体的に行います。小グループ研究では、4〜5

人でグループを構成し、研究室が所有するデータを活用しながら、解析方法とレポートニングの技術を習得します。研究会所属1期目のメンバーには、研究テーマの育て方、論文の読み方の訓練を別途提供しています。これらの活動は、メンターと呼ばれる特任教員や研究員がサポートしています。

こうした活動を通じて、メンバーは個人のパフォーマンスだけでなく、チームのパフォーマンスを最大化するために、どのようにチームに貢献し、チームを組織化し、マネジメントするか、また利己と利他のバランスをどのように調和させるか、を体験的に学びます。こうした経験は、卒業後も生涯を通じて主体的にキャリアを切り開くことに役立つものと確信しています。

研究会では、学部生同士だけでなく、大学院生や卒業生、社会の第一線で活躍している人たちとの交流も推奨し、研究と実践とのつながりを実感し、キャリア選択に向けた視野の拡大を図っています。

## 社会的課題解決と自己成長

小日向将造君 環境情報学部4年

島津明人研究会では、メンタルヘルスの研究と実践について、多角的な視点で捉えながら研究をする環境が整っています。毎週のゼミでは、メンバーの進捗発表や小グループ活動を通じて、研究の進展とスキルの向上を図ります。メンバー間の仲は非常に良く、お互いの進捗発表に対してのアドバイスや意見を言い合っただけでなく、切磋琢磨できる雰囲気があります。また、スキル面での課題がある場合はメンターの先生方から、親身に指導を受けることができます。特に、統計分析の過程で壁に当たることも多いですが、メンバー同士で協力しながら乗り越えることができるため、研究を通じて社会的な意義と自分自身の能力向上に取り組めることが魅力的です。



# 「子どもたちがその子らしく過ごす」ことを考える

本プロジェクトでは、子どもや家族に関する現象や支援の在り方について、文献検討や体験型学習を通して、探究していきます。

おざわのりこ

看護医療学部 専任講師

医療の進歩に伴い、病気と共に成長していく子どもたちが増えていきます。小児看護学は、病院での療養生活のみならず、子どもたちがその子らしく過ごすために、地域や社会生活におけるさまざまな場で支援に取り組んでいます。

私たちの研究室の取り組みに、病気をもちながら学校生活を送る子どもたちの支援があります。その中で注力しているのが「学校教員への支援」です。近年、学校教員に求められる医療的な対応が増えており、研修などのサポートが不足しており、教員が不安を抱えているのが現状です。私たちは特に、てんかんをもつ子どもへの対応について、教員向けの研修プログラムの構築に取り組んでいます。プログラムには、これまで多くの先生方がご参加くださり、その反響を通して、取り組みの意義を実感しています。研修の効果について発表した日本小児保健協会学術集会では、若手奨励賞を受賞することもできました。今後も、支援の構築を目指して取り組んでいきたいと考えています。

私のプロジェクトでは、学生にもこのような取り組みに参加してもらいながら、さらに学生自身が関心を持ったテーマについて、フィールドワークや文献研究を通じて課題や支援方法を探究していきます。

地域や社会生活での支援は、医療職だけでなく、さまざまな専門職が協力し合いながら実践していく必要があります。2024年度には、SFCの環境を生かして、看護医療学部と総合政策学部、環境情報学部との共同プロジェクトを立ち上げ、活動を行いました。さまざまなフィールドに向き、体験型学習を通して、3学部の学問を融合しながら、支援方法を検討しました。そこから生まれたアイデアは斬新で、私自身も多くの気づきを得られました。学生たちと共に学びを深める貴重な場となっています。

子どもたちやそのご家族、支援している方々に対して、学生たちが温かい気持ちで関心を寄せ、真摯に取り組んでいる姿に触れるたび、未来の小児看護学の発展が期待できると実感します。

## 子どもたちから得る学び

あべあやか とよとみゆり ふくとめひかる 看護医療学部4年  
安部彩楓君 豊自由梨君 福留光琉君 (執筆当時)

小澤プロジェクトでは、病気や障がいをもつ子どもたちへの看護や支援について意見を交わしながら学びを深めています。2024年度は、夏に総合政策学部と環境情報学部との3学部合同で、病気をもつ子どもへの支援方策を検討するプロジェクトに参加し、こどもホスピスやインクルーシブ教育を取り入れている保育園、特別支援学校等の計5施設を訪問しました。他学部の学生とのフィールドワークやディスカッションでは、看護医療学部での日々の学びとはまた違った視点を得ることができました。これらの経験から、卒業プロジェクトでは、障がいをもつ子どもたちへのインクルーシブ教育について着目し、考察を深めました。

